

大学生の規範意識に関する調査 ——経営学部一年生の事例を通して——

李 為

要 旨

本稿は大学生のキャンパス規範意識の事実関係を把握するために、2016年4月入学の経営学部一年生を対象に行った実態調査の分析結果である。キャンパスにおける規範意識に関する自己認知の測定尺度を用いて、質問紙調査を行い、性別や社会規範の意識について分析し考察した。調査結果について初歩的な統計分析を行った。その結果、授業中の私語、授業への出席、キャンパスでの喫煙、脱法ハーブの使用、未成年飲酒と喫煙の経験者数は男女間に有意な相関関係がみられた。性別では、男女共に未成年飲酒と未成年喫煙に対する意識は、規範意識によるものではなく、健康意識によって判断される傾向にある。さらに男子学生は女子学生に比べて未成年飲酒と喫煙の経験者数の割合が高く、規範認知では大学生の意識の低さが目立っている。これらのことから、大学生初年次への規範教育は重要であり、キャンパスの規範意識を高めていく教育環境作りの必要性を示唆する。

目 次

1. 問題提起
2. 社会規範に関する一般的記述
3. 調査の目的と概要
4. 考察：規範意識の空間表象
5. 結語

1. 問題提起

大学生はかけがえのないキャンパスライフを生き、社会の未来を担う存在である。大学教育において、若者の育成と支援に当たっては、特に初年次教育への施策が重要である。つまり、キャンパスライフにおける生活能力の習得と学力の向上などすべての学生の健やかな成長への環境作りが必要である。しかし、キャンパスライフを営む上での規範意識の有無によって、キャンパスライフの質が変わり、ひいては大学といったフォーマルな集団規範に影響をもたらす。さらにフォーマルな規範はインフォーマルな規範の有り様を規定する重要な要件である。内閣府平成23年版「子ども・若者白書」によると、若者をめぐる環境の悪化やニート、ひきこもり、不登校等子ども・若者の抱える問題の複雑化、さらに従来個別分野における縦割りの対応では限界が生じていると指摘され、若者育成支援のための大綱（子ども・若者育成支援推進大綱）を策定し、社会生活を円滑に営む上での困難を有する子ども・若者を支援するためのネットワーク整備等を主な内容とする「子ども・若者育成支援推進法」が平成24年の4月1日より施行された。近年、増加しつつある少年非行などが数多く報告されている一方、少子化も進む中で、大学に入ってくる学生の質の低さも目立つよう

になっている。大学に求められている役割は、教養人を育ちながら、勉強のできない子を伸ばすことも視野に入れなければならない。こうした背景から、キャンパスにおける規範意識の希薄さと捉えられ、教育的にも学術的にもその実態について関心が持たれる。特に合コン、飲み会などのことば表現に象徴されているように、学生が仲間で飲酒を過大評価している。仲間がいると、その誇張された仲間意識に基づいて、飲む量をはるかに超えてしまう。大学教育という視点に立てば、大学生の社会規範に関して一概に彼らの自己コントロールに委ねるとは言えず、彼らを取り巻く集団的規範について検討する余地が残される。とりわけ、大学というフォーマル規範は大学生たちによって集合的に解釈し直され、さらにインフォーマル規範に置き換えられ、個人の実行動により直接的な影響を与える。そういった個人的な行動を考察する心理学的なアプローチはほとんど個々の心理的要因から検討している。しかし、大学生の規範意識を考察するにあたり、集団規範という社会的要因の検討も必要だと筆者が考える。そこで、まず、規範意識とは何かについて概観したうえで、本学経営学部一年生を対象とした質問紙調査による接近で、その社会規範意識の事態および規範意識構造を確認する。この分析結果を踏まえたうえで、今後どのような取り込みが可能であるかについて検討することは本稿の目的である。

2. 社会規範に関する一般的記述

まず、法的な記述について周知のとおり、若者の社会規範に関する法的規定は、とりわけ、飲酒と喫煙があり、平成12年と平成13年に未成年の飲酒と喫煙の取締りを強化する目的で、相次いで改正された。平成12年に制定された「未成年者喫煙禁止法及び未成年者飲酒禁止法の一部を改正する法律」（平成12年法律第134号）では、対象が販売行為者のみから、経営者、経営法人、役員、従業員などへと拡大され、さらにその防止に努めることが求められる。この法律では、第1条について満20歳未満の者の喫煙を禁止し、親権者やその他の監督者、煙草を販売・供与した者に罰則を科すことを定めている。さらに第3条について未成年者の喫煙を知りつつ制止しなかった親権者等は科料に処せられるが、同様に監督者としての学校の責任について、文部科学省学習指導要領に基づく喫煙防止教育を徹底させることが求められている。これによって、特に大学生の未成年の飲酒について大学授業のゼミ運営においても教員の監督者としての責任が一層重くなる。このような法的規制が強化されている一方、未成年の飲酒と喫煙が減ることがなく、若者の行動は法的拘束力を再解釈し無化している。大学の教育制度との関連においても葛藤しながら反抗などを起こしつつある。したがって、大学生の社会規範意識の実態を把握し、大学教育が対応していくことはきわめて重要である。

上記の法的記述に対して学術的な記述も踏まえておこう。まず、本稿で取り上げた規範意識とは何か。社会学において人間の社会集団におけるルールや慣習のことであり、明文化された規範があれば、暗黙で守っている規範もある。また、規範に関する語法は「～である」と記述される事実に

対し、「～べきである」と記述される社会規範体系を指している。しかし、人間の社会集団におけるルールや慣習は多岐にわたるものが含まれているが、アメリカの社会心理学者 Newcomb (1950) によれば、集団規範 (social Inorm) を集団成員に共有された準拠枠 (frame of reference) と定義されている。他方、準拠枠が共有されているとみなすべきかが明確でないし、しばしば混乱しているという指摘もある。Émile Durkheim (1925) は、「自殺論」においてアノミー (anomie) という概念を用いて、社会規範の喪失、無規制にある状態を指している。アノミー的現象を近代社会の病理とみなし、前近代社会の病理と区別され規範が弛緩した状態においては、個人が必ずしも自由になるとは限らず、かえって不安定な状況に陥りやすい。つまり、規範が失われている状態にある社会は不安定な社会でもある。Durkheim はその後、さらに学校教育における道德規範の三要素について、規律の精神、社会集団への愛着、意志の自律性という実践方法にかかわる教育論を述べていた。このように定義された社会規範は、集団のレベルにおいて規範が繰り返し生起する集団の成員全体に共有されると理解することができる。本稿においては、大学生の社会規範意識とは、ある物事あるいは出来事について行った価値判断として定義しておこう。さらにこの価値判断は大学生活という社会的要因によって規定される。

それでは、実際に、規範的な価値判断は大学生がどのように行われているのだろうか。あるいは社会規範に対して、集団の規制と個人の自由という認識を持っているのであろうか。たとえば、脱法ハーブ使用は違法ではないが、道徳的に認識されることが多い一方、未成年の飲酒に対して違法ではあるが、文化的慣習に相当するとみなされ、個人の自由として認識されていることが多い。こうした大学生の社会規範意識を明らかにするため、とりわけ、キャンパスライフという範疇に限定しながら、未成年の飲酒、未成年の喫煙、授業の出席、授業中の私語、キャンパスの禁煙、公共の場での行動の 11 項目の規範的価値判断についてどのように認識しているのか、その実態と意識構造を質問紙調査で明らかにする。

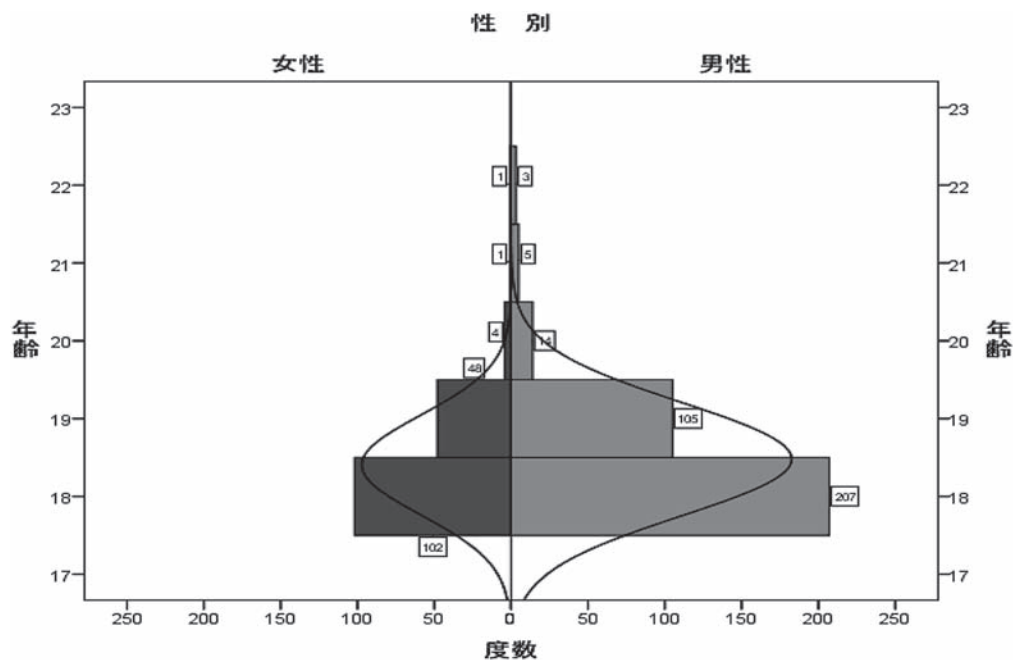
3. 調査の目的と概要

(1) 調査の目的

上記に述べている社会規範の定義を分析の枠組みとして規範意識を測る尺度を準備した。事実について尋ねる 10 の質問項目および意識について尋ねる 11 の質問項目を用いて、2016 年 7 月に、2016 年 4 月入学の経営学部一年生約 700 名を対象に意識調査を行った。回収した有効回答票は 490 名 (女性 156 名 (31.8%), 男性 334 名 (68.2%)) であった。年齢分布は最小 18 歳と最大 22 歳、平均 18.46 歳である (図 1)。男子学生と女子学生の未成年時飲酒の割合 (60%以上) が非常に高かったが、それに対して、未成年時喫煙の割合が比較的低かった。今回の調査した一年生の居住形態は 6 割ほどの学生は実家に暮らし、寮暮らしの学生は約 15%、一人暮らしの学生は約 19%、下宿暮らしの学生は約 8%だったことが分かった。ソーシャルゲームを利用していると答えた学生はわずかで

あったが、男女とも8割近い利用していないと答えた。これに対して、SNS（ソーシャル・ネット・ワークサービス）の利用者の割合（8割）が非常に高かった。恋愛関係において、現在恋人がいるか否かについて尋ねたところ、「いる」と答えた学生は女性33%、男性22%だったことが分かったが、以外に少なかった（図2～図7）。

事実に関する質問項目には、性別、年齢、居住形態、飲酒の有無、喫煙の有無、未成年時の飲酒経験、未成年時の喫煙経験、SNS使用の有無、ソーシャルゲーム利用の有無の10項目が含まれている。規範意識に関する質問項目には、未成年の飲酒はより厳しく規制されるべきか（Q1）、教師が授業中の私語を注意するべきか（Q2）、未成年の喫煙はより厳しく規制されるべきか（Q3）、脱法ハーブは違法ではないので使用しても良いか（Q4）、講義中に講義と関係ないこと（私語、内職、睡眠など）をするべきか（Q5）、学内の許可されていない場所で喫煙してもよいか（Q6）、先生の目が届かない所で講義とは関係のないことをしてもよいか（Q7）、SNSで個人情報を書き込むことは禁止されるべきか（Q8）、大学の授業に必ず出席するべきか（Q9）、女性が通学時に公共の場で化粧をしても良いか（Q10）、キャンパスは全面禁煙にするべきか（Q11）の11変数項目が含まれている。意識に関する（Q1～Q11）質問尺度は4件法（そう思わない、あまりそう思わない、まあそう思う、そう思う）を採用し、後に否定的な選択から肯定的な選択まで1点～4点の点数化を行った。



女性：平均値 = 18.4 歳 標準偏差 = 0.64 歳 N = 156
 男性：平均値 = 18.48 歳 標準偏差 = 0.73 歳 N = 334

図1

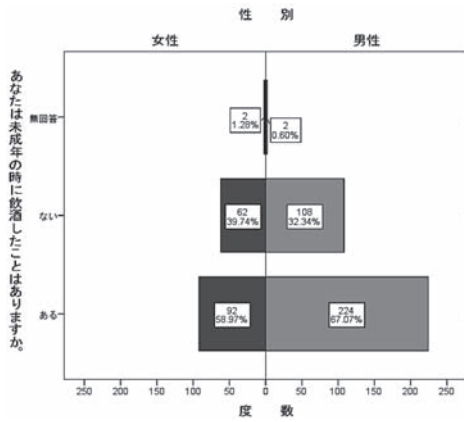


図 2

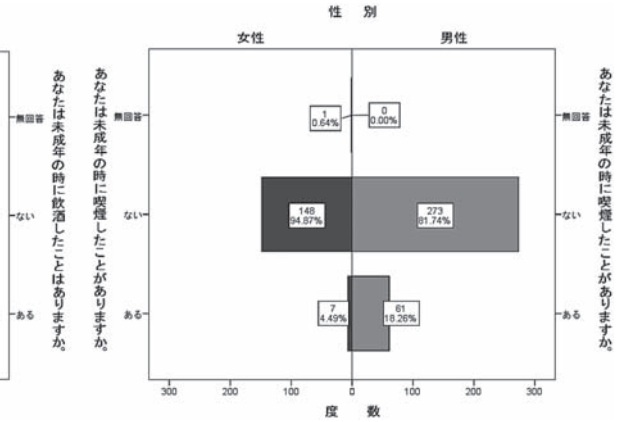


図 3

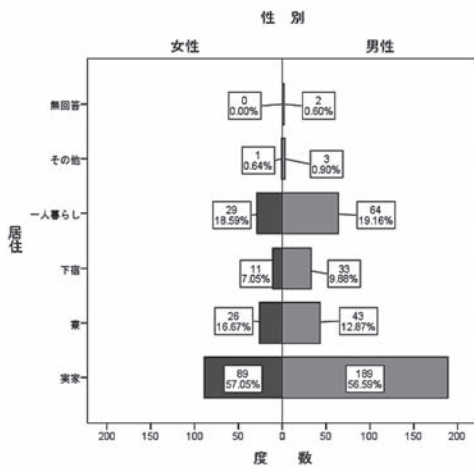


図 4

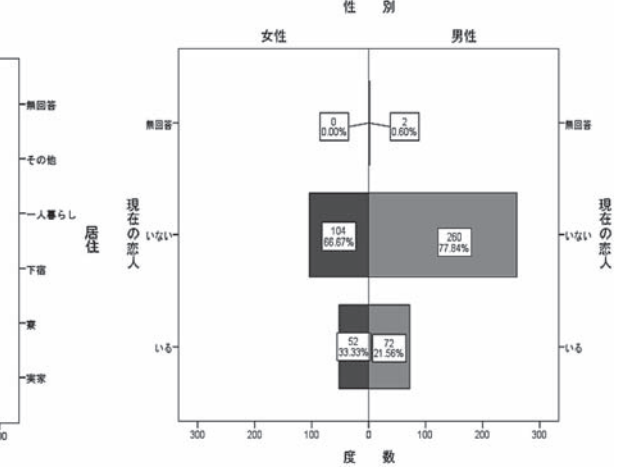


図 5

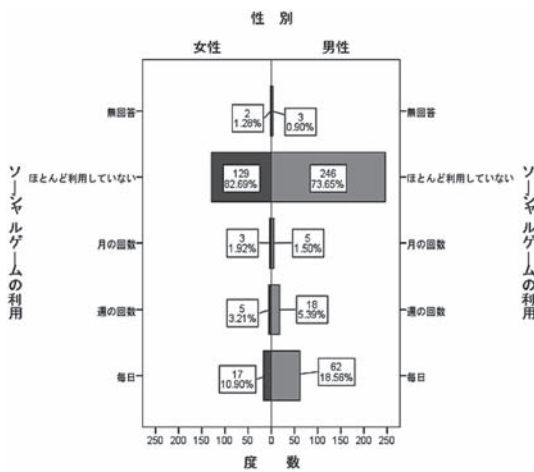


図 6

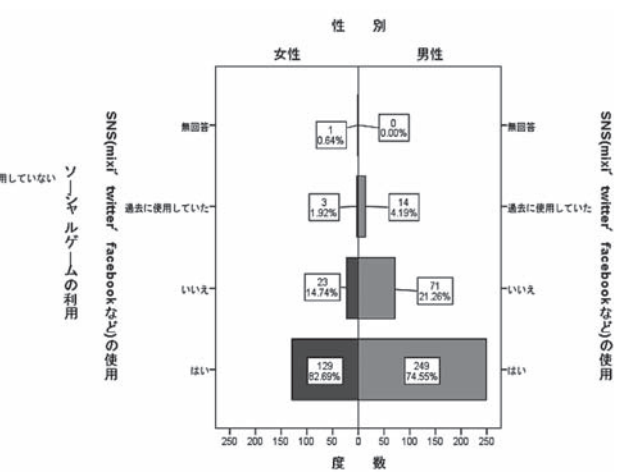


図 7

(2) 未成年の飲酒について

現在飲酒の有無について尋ねたところ、女子学生の「飲まない」と回答したのは62.2%、男子学生の「飲まない」と回答したのは57.2%だった。これに対して、「飲む」と回答したのは女子学生の36.5%と男子学生の41.9%だった。「飲まない」と「飲む」の男女回答に関する統計的な有意差がなかった。つまり女子学生より男子学生の飲酒者数が多いとは言えない(表1)。さらに未成年時の飲酒経験があるか否かについて尋ねたところ、「ある」と答えたのは女子学生59%、男子学生67.1%だった(図2)。未成年時の飲酒経験においても男女相違の有意差が認められず、女子学生は男子学生より多いとは言えない。しかし、男女平均年齢の18.46歳から考えると、未成年の飲酒と未成年時の飲酒経験の割合が非常に高かった。

表1

		あなたはお酒を飲みますか			合計	
		飲まない	飲む	無回答		
性別	女性	度数	97	57	2	156
		%	62.2%	36.5%	1.3%	100.0%
	男性	度数	191	140	3	334
		%	57.2%	41.9%	0.9%	100.0%
合計		度数	288	197	5	490
		%	58.8%	40.2%	1.0%	100.0%

$$\chi^2=1.37 \quad df=2 \quad p=0.504$$

上記の飲酒に対して、現在喫煙の有無についての回答は、「吸わない」と答えたのは女子学生97.5%、男子学生90.4%だったことに対して、「吸う」と答えたのは女子学生1.9%、男子学生9.6%だった(表2)。さらに未成年時の喫煙経験があるか否かについて尋ねたところ、「ある」と答えたのは女子学生4.5%、男子学生18.3%だった(図2)。現在の飲酒と未成年時の飲酒に示している割合の高さに比べ、現在の喫煙と未成年時の喫煙に示している割合がかなり低かった。いずれ、男子学生と女子学生の間での統計的な有意差が認められ、つまりタバコを吸わない女子学生は男子学生より多く見られ、喫煙に関する男女間の認識が異なっている(表2)。

表2

		あなたはタバコを吸いますか			合計	
		吸わない	吸う	無回答		
性別	女性	度数	152	3	1	156
		%	97.5%	1.9%	0.6%	100.0%
	男性	度数	302	32	0	334
		%	90.4%	9.6%	0.0%	100.0%
合計		度数	454	35	1	490
		%	89.2%	7.1%	0.2%	100.0%

$$\chi^2=15.27 \quad df=3 \quad p=0.002$$

(3) キャンパスの全面禁煙と隠れて喫煙すること

上記の喫煙率の低さに関連して、キャンパスは全面禁煙にするべきか否かについて尋ねたところ、「そう思わない」と「あまりそう思わない」といった否定的な回答は女子学生 34.8%，男子学生 43.2%だった。「まあそう思う」と「そう思う」といった肯定的な回答は女子学生 65.1%，男子学生 56.8%だった。キャンパスの全面禁煙にすべきだと考えている学生は男女問わず 57.5%を占めている。特にキャンパスの全面禁煙にすべきだと答えた女子学生は男子学生より多く見られた。このような男女間の相違は統計的な有意差が認められ、つまり、女子学生は男子学生より嫌煙の傾向があると考えられる（表3）。

表 3

			大学キャンパスは全面禁煙にするべきだと思いますか				合計
			そう思わない	あまりそう思わない	まあそう思う	そう思う	
性別	女性	度数	9	45	27	74	155
		%	5.8%	29.0%	17.4%	47.7%	100.0%
	男性	度数	63	80	57	131	331
		%	19.0%	24.2%	17.2%	39.6%	100.0%
合計		度数	72	125	84	205	486
		%	14.8%	25.7%	17.3%	42.2%	100.0%

$$\chi^2=15.11 \quad df=3 \quad p=0.002$$

さらに学内の許可されていない場所での喫煙はしてもよいかについて尋ねた。「そう思わない」と「あまりそう思わない」といった否定的な回答は女子学生 93.6%，男子学生 87%だった。「まあそう思う」と「そう思う」といった肯定的な回答は女子学生 6.5%，男子学生 12.9%だった。キャンパスの許可されていない場所での喫煙は男女問わず 9割近く、よくないと思っている。女子学生の方は男子学生より若干厳しく見ている傾向にある。この両者の違いは統計的な有意差が認められた(表4)。

表 4

			あなたは、学内の許可されていない場所で喫煙してもよいと思いますか				合計
			そう思わない	あまりそう思わない	まあそう思う	そう思う	
性別	女性	度数	119	26	4	6	155
		%	76.8%	16.8%	2.6%	3.9%	100.0%
	男性	度数	210	78	21	22	331
		%	63.4%	23.6%	6.3%	6.6%	100.0%
合計		度数	329	104	25	28	486
		%	67.7%	21.4%	5.1%	5.8%	100.0%

$$\chi^2=9.37 \quad df=3 \quad p=0.025$$

(4) 授業態度と教員への役割期待

授業中の私語、睡眠について尋ねたところ、「そう思わない」と「あまりそう思わない」といった否定的な回答は女子学生 37.4%，男子学生 40.3%だった。「まあそう思う」と「そう思う」といった肯定的な回答は女子学生 62.6%，男子学生 59.7%だった。つまり6割も超えた学生は講義中に講義と関係ないことをすべきではないと認識している。女子学生は男子学生よりその割がわずか高かった。この男女間の相違は統計的な有意差が認められ、すなわち、女子学生は男子学生より従順的だと考えられる（表5）一方、教員の目が届かない所で講義とは関係のないことをしてもよいかについて、「そう思わない」と「あまりそう思わない」といった否定的な回答は女子学生 69%，男子学生 62.7%だった。「まあそう思う」と「そう思う」といった肯定的な回答は女子学生 32.9%，男子学生 37.2%だった。つまり6割も超えた学生は講義中に教員の目が届かない所でも、講義と関係ないことをすることはよくないと認識している。この点において女子学生と男子学生の有意差が認められなかった（表6）。

表5

		あなたは講義中に講義と関係ないこと (私語, 内職, 睡眠など) をするべきではないと思いますか				合計	
		そう思わない	あまりそう思わない	まあそう思う	そう思う		
性別	女性	度数	5	53	72	25	155
		%	3.2%	34.2%	46.5%	16.1%	100.0%
	男性	度数	32	102	131	67	332
		%	9.6%	30.7%	39.5%	20.2%	100.0%
合計		度数	37	155	203	92	487
		%	7.6%	31.8%	41.7%	18.9%	100.0%

$$\chi^2=8.28 \quad df=3 \quad p=0.041$$

表6

		あなたは講義中に、先生の目が届かない所で講義とは 関係のないことをしてもよいと思いますか				合計	
		そう思わない	あまりそう思わない	まあそう思う	そう思う		
性別	女性	度数	21	83	44	7	155
		%	13.5%	53.5%	28.4%	4.5%	100.0%
	男性	度数	62	147	91	33	333
		%	18.6%	44.1%	27.3%	9.9%	100.0%
合計		度数	83	230	135	40	488
		%	17.0%	47.1%	27.7%	8.2%	100.0%

$$\chi^2=7.38 \quad df=3 \quad p=0.061$$

以上の受講態度に関する意識を踏まえて、「教師が授業中の私語を注意すべきか」について尋ねたところ、「そう思わない」と「あまりそう思わない」といった否定的な回答は女子学生 21.7%，男子学生 15.9%だった。「まあそう思う」と「そう思う」といった肯定的な回答は女子学生 78.2%，男子学生 84%だった。女子学生と男子学生が合わせて 8 割も超えた学生は「教員が授業中の私語を注意すべきだ」と考えている。しかも、男子学生の方は女子学生より「注意すべき」だと思ふ割合が高い。この男女間の相違は統計的な有意差が認められ、すなわち、男子学生は女子学生より統制的だと考えられる（表 7）。

さらに「授業に必ず出席するべきだ」と思うかについて尋ねた。「そう思わない」と「あまりそう思わない」といった否定的な回答は女子学生 21.3%，男子学生 34.2%だった。「まあそう思う」と「そう思う」といった肯定的な回答は女子学生 78.7%，男子学生 65.7%だった。出席すべきか否かについて、女子学生と男子学生の考え方の大きな違いが見られた。この違いの統計的有意差が認められているため、女子学生より男子学生は授業に出たがらない傾向にあると考えられる（表 8）。

表 7

			あなたは、教師が授業中の私語を注意するべきだと思いますか				合計
			そう思わない	あまりそう思わない	まあそう思う	そう思う	
性別	女性	度数	6	28	86	36	156
		%	3.8%	17.9%	55.1%	23.1%	100.0%
	男性	度数	17	36	156	124	333
		%	5.1%	10.8%	46.8%	37.2%	100.0%
合計		度数	23	64	242	160	489
		%	4.7%	13.1%	49.5%	32.7%	100.0%

$\chi^2=12.47$ df=3 p=0.006

表 8

			あなたは、大学の授業に必ず出席するべきだと思いますか				合計
			そう思わない	あまりそう思わない	まあそう思う	そう思う	
性別	女性	度数	6	27	75	47	155
		%	3.9%	17.4%	48.4%	30.3%	100.0%
	男性	度数	38	76	131	88	333
		%	11.4%	22.8%	39.3%	26.4%	100.0%
合計		度数	44	103	206	135	488
		%	9.0%	21.1%	42.2%	27.7%	100.0%

$\chi^2=10.76$ df=3 p=0.013

(5) SNSでの個人情報の書き込みと公共の場でのお化粧

SNSで個人情報を書き込むことは禁止されるべきだと思うかについて尋ねたところ、「そう思わない」と「あまりそう思わない」といった否定的な回答は女子学生31%、男子学生38%だった。「まあそう思う」と「そう思う」といった肯定的な回答は女子学生68.1%、男子学生61.9%だった。女子学生と男子学生が合わせて6割も超えた学生は「SNSで個人情報を書き込むべきではない」と考えている。しかし、女子学生より男子学生の方は否定的な回答の割合が高かったが、この男女間の相違は統計的な有意差が認められなく、すなわち、男子学生は女子学生より個人情報を書き込むべきだと思う人が多いとは言えない(表9)。

上記のネット上のバーチャル「公共」に対して、公共の場でのお化粧をしてもよいか否かについて尋ねたところ、「そう思わない」と「あまりそう思わない」といった否定的な回答は女子学生70.3%、男子学生65.7%だった。「まあそう思う」と「そう思う」といった肯定的な回答は女子学生29.7%、男子学生34.2%だった。女子学生自身は否定的な回答は男子学生より高かった。この男女の違いは統計的な有意差が認められないため、男子学生は「公共の場でお化粧すること」に対して女子学生より寛容的に見ているとは言えない(表10)。

表9

		あなたは、SNSで個人情報を書き込むことは禁止されるべきだと思いますか				合計	
		そう思わない	あまりそう思わない	まあそう思う	そう思う		
性別	女性	度数	10	38	70	37	155
		%	6.5%	24.5%	45.2%	23.9%	100.0%
	男性	度数	33	94	113	94	334
		%	9.9%	28.1%	33.8%	28.1%	100.0%
合計		度数	43	132	183	131	489
		%	8.8%	27.0%	37.4%	26.8%	100.0%

$\chi^2=6.28$ df=3 p=0.099

表10

		あなたは、女性が通学時に公共の場で化粧をしても良いと思いますか				合計	
		そう思わない	あまりそう思わない	まあそう思う	そう思う		
性別	女性	度数	33	76	36	10	155
		%	21.3%	49.0%	23.2%	6.5%	100.0%
	男性	度数	93	126	86	28	333
		%	27.9%	37.8%	25.8%	8.4%	100.0%
合計		度数	126	202	122	38	488
		%	25.8%	41.4%	25.0%	7.8%	100.0%

$\chi^2=5.813$ df=3 p=0.121

(6) 薬物使用に対する規範意識

脱法ハーブは違法ではないので使用してもよいと思うかについて尋ねたところ、「そう思わない」と「あまりそう思わない」といった否定的な回答は女子学生 91.6%，男子学生 85.2%だった。「まあそう思う」と「そう思う」といった肯定的な回答は女子学生 8.4%，男子学生 14.8%だった。女子学生と男子学生が合わせて 8 割も超えた学生は「脱法ハーブは違法でなくても使用してはよくない」と考えている。しかし、女子学生より男子学生の方は肯定的な回答（14.8%）の割合が高かったが、この男女間の相違は統計的な有意差が認められなく、すなわち、男子学生は女子学生より脱法ハーブ使用への容認ができると思う人が多いとは言えない（表 11）。

表 11

		あなたは、脱法ハーブは違法ではないので 使用しても良いと思いますか				合計	
		そう思わない	あまりそう思わない	まあそう思う	そう思う		
性別	女性	度数	99	42	8	5	154
		%	64.3%	27.3%	5.2%	3.2%	100.0%
	男性	度数	211	71	35	14	331
		%	63.7%	21.5%	10.6%	4.2%	100.0%
合計		度数	310	113	43	19	485
		%	63.9%	23.3%	8.9%	3.9%	100.0%

$\chi^2=5.22$ $df=3$ $p=0.156$

4. 考察：規範意識の空間表象

以上、社会規範意識に関する実態を、性別による違いを中心に検討してきたが、初歩的な統計分析であったとはいえ、そこに現れた男女間の相違と、また認められなかった男女間の相違についてより明確な説明が必要である。筆者はこれらの規範意識に関する 11 変数項目の近似性をなるべく低次元においての抽出を可能にするために、多次元尺度法 (Alscal) という分析をもちいて試みた。モデルの適合性指標結果の Stress (Normalized Raw Stress) 値 (Stress = .05429) は非常に小さい、しかも RSQ = .98820 値は非常に高かったため、分析モデルの適合度が比較的良好という判断ができる。多次元尺度法の大切なところは、そのアウトプットとした規範意識の空間布置図であり、社会規範に関する意識構造は結果として規範意識の空間布置の差異をもたらした (図 8)。

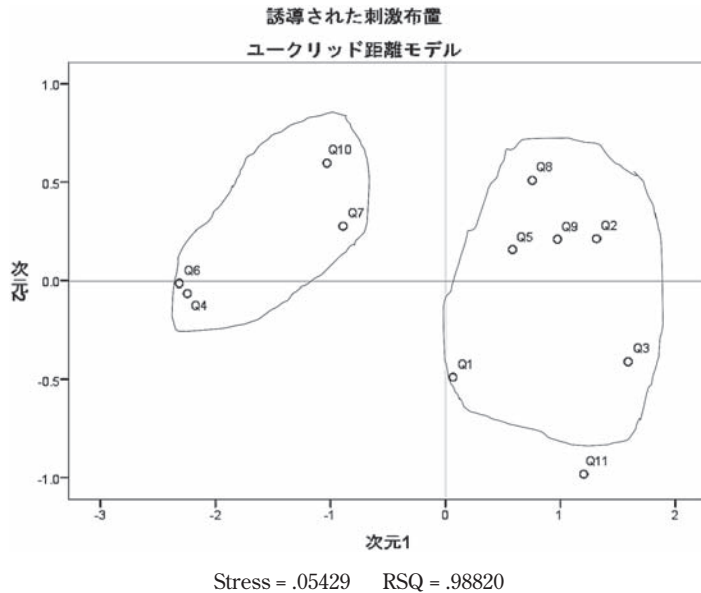


図 8

前に述べているように、規範意識を測る 11 の項目として、未成年の飲酒はより厳しく規制されるべきか (Q1)、教師が授業中の私語を注意するべきか (Q2)、未成年の喫煙はより厳しく規制されるべきか (Q3)、脱法ハーブは違法ではないので使用しても良いか (Q4)、講義中に講義と関係ないこと (私語、内職、睡眠など) をするべきか (Q5)、学内の許可されていない場所で喫煙してもよいか (Q6)、先生の目が届かない所で講義とは関係のないことをしてもよいか (Q7)、SNS で個人情報を書き込むことは禁止されるべきか (Q8)、大学の授業に必ず出席するべきか (Q9)、女性が通学時に公共の場で化粧をしても良いか (Q10)、キャンパスは全面禁煙にするべきか (Q11) の 11 項目の説明尺度を用いて、社会規範意識の差異を説明する。図 8 はユークリッド距離線形モデルの適合度散布図である。すなわち、データの不一致程度と線形モデルによって計算されたユークリッド距離間の散布図である。11 個の変数の近似性の程度にもとづき空間に並べたため、得られた図形の散布点間の相関性を合理的に解釈することができる。今回の分析モデルの線形的相関はほぼ直線に散布しているため、分析モデルの適合度が非常によいことを意味している。このように 2 次元分析であるにもかかわらず、あらためて 11 項目の説明変数を用いて規範意識の空間布置として捉えることができた。

まず図 8 を見ると、右の象限に集まっているのは Q1, Q2, Q3, Q5, Q8, Q9, Q11 の統制力の強い次元であり、左の象限に集まっているのは Q4, Q6, Q7, Q10 の統制力の弱い次元である。図中に示すパターンは、類似性データをクラスター分析した際の結果とほぼ一致している。図中の枠はクラスター分析による分類の結果を示している。

以上の多次元尺度法によって得られた空間布置図を用いて、11 項目の説明変数を「社会規範」の

強弱と「統制力」の強弱の二つの軸において再解釈を試みる。その結果、図8を図9に変換されたのち、より良い簡潔な説明モデルが得ることができた。つまり、社会的規範（+）軸と統制力（+）軸が囲んでいる象限における「授業中の私語」「私語への注意」「個人情報の書き込み」「授業への出席」のいずれの要素が強い社会規範と強い統制力によってもたらされたものである。社会的規範（+）軸と統制力（-）軸が囲んでいる象限における「授業時の潜在的行動」「公共の場での顕在行動」の要素が強い社会規範と弱い統制力によってもたらされたものである。統制力（-）軸と社会規範（-）軸が囲んでいる象限における「脱法ハーブの使用」「無許可場所での喫煙」の要素が弱い統制力（-）と弱い社会規範（-）によってもたらされたものである。最後の象限は統制力（+）軸と社会規範（-）軸によってもたらされた「未成年の飲酒」「未成年の喫煙」「キャンパス禁煙」の要素である。

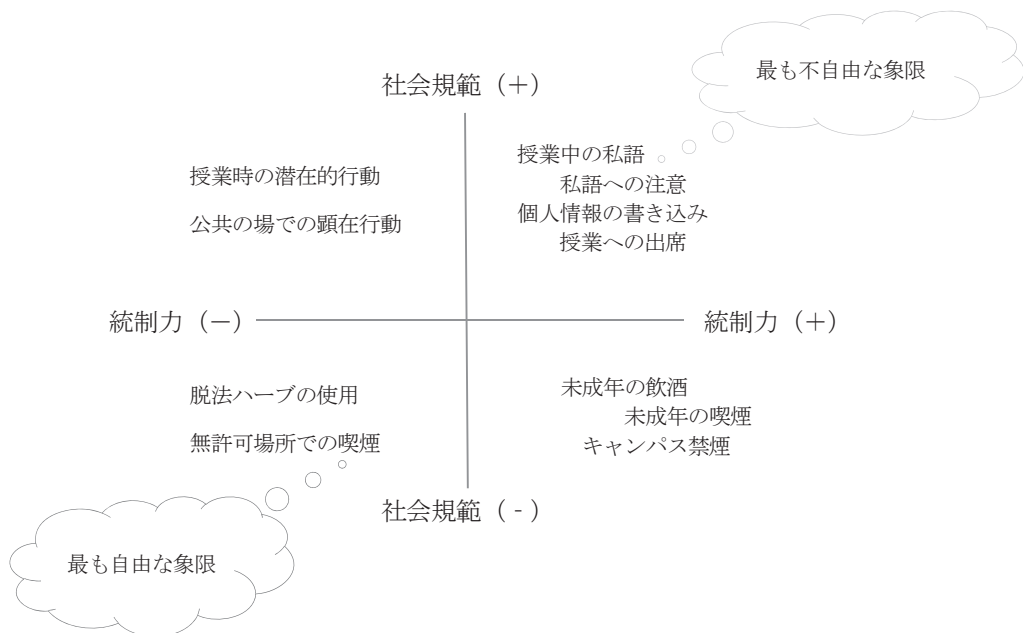


図9

5. 結語

以上、大学生の社会規範について実証的に検討してきた。価値の多元化、生活様式の多様化が進む現代社会において、大学生の規範意識に現れたる価値判断は本人自身が発達的に規範の意味を問いただすただただ中にあり、今回の調査結果は自己決定の価値判断を発達させるという実証的証拠でもある。未成年の喫煙と飲酒、薬物の使用などの逸脱行為が完全にはなくなることだろう。しかしながら、大学教育において、社会規範を共有する場としてどう対処すればよいかは今後の課

題である。社会規範と統制力だけが強める大学はその存在価値が薄れていく。しかし、学問の自由を保障するという大名義の下で、規範と統制力がともに弱めていけば教育崩壊のリスクも避けなければならない。大学教育の限界を乗り越えていくためには、社会規範的な事柄に関して大学教育という枠を超えて、より広い意味での社会規範の共有が必要になるだろう。大学、教員、家庭、地域の異なるそれぞれの規範を示すことができる多様な価値規範を、大学教育プログラムに組み入れることが必要である。つまり、大学教育は自ら大学という枠組みを超えて、特に初年次教育において発達的な視点からみる大学生の規範意識の希薄性を補う役割を、大学が自ら獲得する。社会規範と統制力の強弱は具体的にどのように規定しているのか今後のもう一つの課題として残される。紙面の関係で、今回、生活背景（居住形態、SNS利用状況、恋人の有無）による分析を割愛したが、以上の二つの課題について、本研究の一部として学年別、学部別、さらに他大学との比較も今後の検証対象である。

参考文献

1. E. デュルケーム（著）、宮島喬（訳）『自殺論』中公文庫版、1985年（原著1897年）。
2. E. デュルケーム（著）、麻生誠・山村健（訳）『道徳教育論』新版講談社学術文庫、2010年（原著1925年）。
3. T.M. ニューカム（著）、森東吾&万成博（訳）『社会心理学』培風館、1956年。
4. 竹内洋・徳岡秀雄編『教育現象の社会学』世界思想社、1995年。
5. 椿美智子『教育の質的向上のための品質システム工学的データ分析—個人差の解析を中心として』現代図書、2007年。
6. 橋本鉦市（編）『大学生：キャンパスの生体史』玉川大学出版部、2010年。
7. 苜谷剛彦・本田由紀（編）『大卒就職の社会学—データからみる変化—』東京大学出版会、2010年。
8. 内閣府編『子ども・若者白書（平成23年版）』2011年。
9. 内閣府編『子ども・若者白書（平成24年版）』2012年。
10. 内閣府編『子ども・若者白書（平成28年版）』2016年。

The Survey of College Student's Normative Consciousness: Analysis by the Example (First Grader) of Business Administration

LEE, Wei

ABSTRACT

This paper is the result that investigated the first grader who entered in April, 2016 to grasp social norm awareness of the undergraduates. Use "Normalized Raw Stress", one of the measurement standards, to measure undergraduate social norm awareness. I implement inventory survey with analyzation and considered the difference according to man/woman and type of habitation. I also made a rudimentary statistical analysis about findings. As a result, a meaningful correlation can be found in whisper, attendance, smoking on campus, diet. Especially, the male students prefer to smoke drink compare with female students. Therefore, the result indicated that education for first grade will be of great importance based on rudimentary analysis. This survey is also beneficial to the education of university.